

吉井 勇



小高根二郎

小高根二郎（おだかね じろう）

1911年 東京に生れる。

1934年 東北大学法文学部卒。

萩原朔太郎に師事し、伊東静雄に兄事した。

『コギト』同人

1956～73年

『果樹園』を刊行し、伊東静雄・蓮田善明・
棟方志功伝を執筆。

著 書 『詩人・伊東静雄』（新潮社）

『蓮田善明とその死』（筑摩書房）

『棟方志功・その画魂の形成』（新潮社）

その他。

現住所 大阪府池田市石橋二丁目六の五

吉井 勇——英雄と歌人の黙契

昭和五十九年三月二十五日発行

著 者 小高根二郎

発行人 沖山隆久

印刷人 坂田啓三

発行所 株式会社沖積舎

東京都千代田区神田神保町一―五二 郵便番号一〇一

電話二九一―五八九一 振替東京三―一七七六三二

好文印刷＋東光印刷 古賀製本

作家論叢書⑧

吉井 勇

— 英雄と歌人の黙契 —

沖積舎

吉井 勇
——英雄と歌人の默契

小高根二郎

目 次

紋章と負目——9

詩魂の養い——16

海の館——21

成形と芽生——30

活字の蠱惑——36

水荘と転身——40

無籍者の帰郷——45

若き日の旅——57

酒ほがひと杯——67

逃亡の蛇——92

祇園と暮春——106

空白と幕合——117

婚いと夜心——127

さすらいの旅——137

寂しさへの登攀——152

遠天寂光——169

あとがき——186

紋章と負目

血汐にてあがなひにけむ

紋章のいはれは知らね

兎やいい角や論ぜど

ししむらに燃ゆるおもひは

からくれなる 同じ色とよ

おおよそ、詩人生成の要因とでも言う重要さで、大なり小なり、詩人と名のつくほどの者なら、その抒情の母胎として、幼年期の魂と肉体に慈育の光と風とを送った小宇宙を、まるで運命であるかのように、引摺っているものである。それは、幼年の日にうけた古傷のように、魂と肉体の生育に従って傷痕は淡くうすれるけれど、決して消え去ると云うことはなく、却って肉体の成長と共に斑痕は大きく広がっているものである。この古傷の存在とか、その傷痕の成長を知らぬほどの者は、もとより詩人となるべき、天稟に恵まれていないわけであるが、この古傷は良いにしろ悪いにしろ、案外成人してからの特徴とさえなっている事例が多い。時としてこの古傷

は、負目となって、人の生涯にのしかかり、呪縛となつては、生死のきわまで人を追いやり、人は詩人となるか死人となるかより、この世にたどる道がない場合がある。歌宗吉井勇もまた、そうした運命に、その誕生から晩年まで、引摺られた一人である。即ち彼の場合は、名門であると言ふことが、生得の古傷であり、負目であつた。人であれば、栄耀の資に供するのに絶妙な名門と云ふ紋章の故に、ことさらに、紅燈の淪落と頹廢に浴みてまで、汚染するかしらないかという検証によつて、その身が血統に値するかどうかを、試してみねばならなかつた。結局、彼はそうした恐怖感と、唯單なるたわれをと呼ぶ巷間の世評の板挟みとなつて、懺悔に懺悔を重ね、それでも懺悔しきれぬ余情が、流離癖を生み、大煩惱のまにまに、転々漂泊して世を過ぎねばならなかつた。そのかなしい生得の古傷と、負目の重さを、まず人は思いみるべきであらう。

吉井勇の祖父三峰翁こと友実は、戊辰の役で、総督西園寺公望が指揮した越後から東北に向つた征討軍に、山縣狂介と共に参謀を務めた功により、伯爵を授つた明治の元勲の一人で、勇の名付け親だつた。彼の幼年の日の追憶のなかに、白い頬髯を生やし、いかめしいしわぶきをし、歌を詠み画を描いて、とりすがるべくもない端然とした高い世界に、面影として、音もなく起居していたのである。

いとけなき日のおもひでの目に浮き来祖父おぢいの頬の白き髭はも

轆轤れきうと祖父乗らす馬車おとの音いまでも遠よりひびき来るがに

六歳の日に死別した三峰翁は、お祖父様と孫と云う、世間的な親愛の情感よりは遠く、近附き
 がたい尊嚴として、床の間の華の凜烈な梅のような清浄感に包まれて、邸の何処かにいたのであ
 り、また木枯のような音のする轆轤れきうの馬車に乗って、紅葉のような手指ではとうてい捕え難い、
 山高二重マントの装いをして、疾風のような無常迅速さで立ち現れては消えいった、泣きだした
 くなるようで涙も出ぬ、はがゆく切ない存在だったのである。

祖父おまぢの葬はうりの列にわれありて赤阪見附過ぎにけるかも

お祖父様はお亡くなりになった。だけれどこの喪失の意味さえもしかとせぬ、稚い六歳の幼年
 の日であつた。所詮、祖父の偉大な精神も、生死の間を幾度か生き抜いた鬚髯かくしやくとした肉体も、頼
 から虎のように生やした髻でしかなかった。また床間に時たまに飾られた、明治十七年試筆と銘
 打たれた髻の色した白梅の墨絵の軸であつた。岩おのように峨々とした幹に、いきなり鉄火のよ
 うに花開いている梅の、とりつく隙もない峻嚴な寡困氣でしかなかった。稚い彼は長い長い葬列
 のなかに混っていた。その行列の長い長い果しなさが、心の何処かに、悲しみと名附くべき感情

となつて、薰っているのであつた。葬列が赤阪見附を過ぎることによつて、その感情は祖父に対する仄かな畏敬の思いに變つていた。

おのづから身に迫り来るもの、あり梅の絵とのみたゞに見がたし

六歳むっの秋祖父おほぢの死に会ひてより無常のおもひ知りしならぬか

稚い勇の心に、祖父の死という事件が、無常という感銘となつて染みついたのは、厳めしく賑やかであつた行事としての葬祭がすんでから、だいぶ日時が経つてからであつた。ふと遊びから解放されてばんやりしてる時など、祖父の臨終の場面が、あたかも芝居の大団円の舞台かのように、衝撃的に蘇つてきた。「お祖父さまが危い」という知らせで、勇は母の手に引かれて駆けつけた。古風で大型な鉄製のベッドで、祖父は小止みなく激しく痙攣けいれんしていた。子供心にも、死が迫っていると直感された。前日、役所から馬車で帰ってくるなり、植木屋に用事があると縁側に出たとたん、庭石の上に転倒して、そのまま昏睡に陥つた。脳溢血だった。白い頬髯は変らなかつたが、慈眼はすでに閉じていた。そして、まるで慟哭してるとしか思えぬような咽び声で、呻吟し続けていた。母は、お別れをさすために、勇をベッドの方へ押しやった。祖父は、勇を確認したのか、しなかつたのか、確かにうめきの中で泣いた。

「お前はこの世に何故生れた。そして俺はこの世から何故死んでしまわねばならないのか」

この怖ろしい言葉に、凍結したように勇の足はすくんだ。「そんなことをおっしやるはずはない」と子供心に否定したが、確かに耳元に、そう祖父は呟いた。

この予期せぬ祖父の遺言が、実は生者必滅という無常の意味であつたと悟つたのは、その日から三十年を経た日であつたが、その他にも、祖父は「思ひきや」に始まる予期せぬ心緒を歌つた和歌を、父を介して勇に遺言していたのであつた。

思ひきや弥彦の山を右手に見て立ちかへる日のありぬべしとは

祖父が生還を期せぬ越後行の販るさ、かつて兵馬倥傯の間に奥津城どころよ……と左手に眺めて過ぎた弥彦の山を、馬上豊かに右手に見て引揚げた時に作られた歌は、好んで父の朗唱と祈願の資に選ばれたのであるが、この「思ひきや」の歌が勇の結縁となり発心となつたのである。この「思ひきや」と云う言葉そのものに秘められている、予期に反した「悦び」と「失望」との相互に背反した性格を、彼は幼年にして、その歌の朗唱を聞かされた日から、運命として背負いこんだのである。それは良いにつけ悪いにつけ、予想と期待を裏切つた、発見の心となつたのである。歌ごころとなつたのである。或いは彼を発心させたところのものは、「思ひきや」に始る祖

父の歌ではなくて、祖父の歌によって教えられた「思ひきや」と云う言葉そのものかと想われるのである。彼の幼年時代に、第一の小宇宙を形成していた東京の芝区高輪南町の、渺茫と海が見渡される邸に於て、この「思ひきや」は祖父の歌とは全く違った意味で、稚い心に深い懷疑と失望の隈をつくったのである。晴れた日には遙々と安房上総の陸影が夢かのように潤んで見渡され、夕になると船のように灯を点したお台場が見下される座敷に、土用になると土蔵から長持や簞笥が運び出され、まるでこの世の中の夢を撒きちらすかのように、絢爛として座敷一杯ひろげられたのである。そこには芝居で見るとな狸々緋や、金糸銀糸の刺繍をほどこした桶襦うちかけ、黒糸緘の鎧、金の定紋打った具足櫃、それから源平の絵図と杜寺縁起を描いた幾折かの屏風。鼈甲の櫛に蒔絵の笄……それに見えて頬が火照って来るような華やかな衣裳。それからそれから何に使うのか解らぬような貴重らしい品々。これがみんな家の物であるかと疑うばかりの嬉しきで、足の踏み場もないその充溢のなかを、小踊りしながら彼は跳ね廻った。が、この品々は父の負目の自覚が深まるにつれ、次々と家から手放された。

目蓋裏熱かりしかも南蛮の時計も皿も売らるゝ見れば

これは彼の持つ夢が一つ一つちぎりとられるような哀傷であった。夢が身体の一部である幼年

の日には、それは手足をもぎとられるような苦痛でもあった。そして泣きたくとも、その理由の解らぬもどかしさが、涙の^{おろ}ように心の底に淀んだ。

何ごとのありし夜^{おほは}でも祖母も母も灯^はかげに泣きてまします

祖父の栄光の日を一番よく知り、その子の負目を、誰よりも知っていた祖母は、こんな夜、母と共に泣かねばならなかったのである。そしてその負目が、やがてわが身に降りかかって来ようなどとは、つゆ知らぬ勇は、人一倍^お疳高い感性によって、その身をめぐる、幸福そのものの霧^き囲気のなかに潜んでいる不幸と悲哀の実況に、早寝の床の中で耳を^{そば}欽てねばならなかったのである。

母わかく眉^み目よくましきわれ小^ちさく疳高かりきその日遠しも